

2014年7月15日

2014年度第4回スポジンサロン

東京都市大学付属小学校

滝澤宣頼

発表要旨 児童のスポーツ観に関する一考察

(発表日: 2014年7月25日)

子どもに関する問題は数多くあるが、その一つに、子どもの体力・運動能力の低下が挙げられる。併せて、運動を積極的に行う者と行わない者の二極化も重篤な問題である。

これらについて文部科学省では、国民の意識が、学力よりも外遊びやスポーツの重要性を軽視する傾向が進んだこと、生活の利便化や生活様式の変化が、日常生活における身体を動かす機会の減少を招いている事に原因を求める。中でも、直接的な原因として、

1. 学校外の学習活動や室内遊び時間の増加による、外遊びやスポーツ活動時間の減少
2. 空き地や生活道路といった子ども達の手軽な遊び場の減少
3. 少子化や、学校外の学習活動などによる仲間の減少

の三点に絞る。

本発表では、文部科学省が推察する体力・運動能力の低下の原因以外として、現代の子どもたちのスポーツ観が影響していると推察する。元来、スポーツは、「他の何ものにも従属しない自立的な性格を持ち、それ自身を目的とする活動と考える。」(佐伯 1984) また、日本体育協会 スポーツ憲章 第一条には、「スポーツは、人々が楽しみ、より充実して生きるために、自発的に行う身体活動である。」と記されている。しかし、子どものライフスタイルは変容し、いつしかスポーツは「習い事」になってしまい、大人の指導がなければスポーツが成立しない環境 (宮島 2008) を懸念する時代となった。これらは、単なる体力・運動能力の低下問題としてだけで捉えるのではなく、その周辺部 (練習、戦術など) への影響も踏まえ、本件を文化論に転化し考察する。